

近い将来、南海トラフ地震が近畿を襲う。あなたは、あまりにも無関心すぎないか？あるいは、過剰に恐れてはいないか？震災の教訓を踏まえ、「防災への覚悟」を問い直す。

身につけるべきは、「想定外」をつねに想定し、油断せず、恐れず生きる智慧。

阪神淡路大震災から21年、東日本大震災から5年、そして今年4月の熊本地震。相次ぐ災害を経て、防災は変化している。インフラ整備や地域コミュニティというハード、ソフトに加え、人間心理からアプローチするヒューマンウェアも重視されている。万二のとき、正しく判断して行動できるか？過去の教訓に学び、覚悟をもって備えることが鍵となる。熊本地震では、想定外の事態で被害が拡大した。南海トラフ地震はどうだろう？近畿の未来は、「防災への覚悟」が命運をわけるといっても過言ではない。

●ひょうご震災記念21世紀研究機構副理事長

室崎 益輝氏



●兵庫県出身。現在、兵庫県立大学特任教授、関西学院大学総合政策学部教授、神戸大学名誉教授。1967年、京都大学工学部建築学科卒業。日本火災学会賞、日本建築学会賞、都市住宅学会賞、防災功労者内閣総理大臣表彰など受賞。京都大学防災研究所客員教授、日本火災学会会長、日本災害復興学会会長、中央防災会議専門委員などを歴任。

●作家（公社）日本河川協会参与

玉岡 かおる氏



●兵庫県出身。神戸女学院大学文学部卒業。作家。神戸文学賞受賞作「夢食い魚のブルーグッドバイ」（新潮社）で文壇デビュー。著書は、第25回織田作之助賞受賞の「お家さん」はじめ「負けんとき〜ヴォーリス満喜子の種蒔く日々」、「天平の女帝 孝謙称徳」、「ウエディングドレス」ほか多数。大阪芸術大学教授。兵庫県教育委員。いなみ野ため池協議会会長として水環境を考える活動にも取り組む。



過去の地震の教訓は、熊本で生かされたのか？

玉岡 四月に熊本で大きな地震が起きました。いまでも多くの方が避難生活をされていると思うと胸が痛みます。

室崎 熊本地震では、震度七の大きな地震が続けて起こったことが「想定外」と言われました。また、自治体の職員が参集できない、避難所が使えないなどの「想定外」も重なりました。しかし、これらは過去に例のない事態だったわけではありません。私たちは、過去の事例からさまざまな事態を想定して防災計画を立てておくことの重要性をあらためて肝に銘じなければなりません。

玉岡 いつまでも続く余震に被災地の方々はどんなに怖い思いをされていることか…。私も阪神淡路大震災を

体験しているのでひとごとと思えません。あれがずっと続くなんで。

室崎 熊本では、繰り返し発生する余震で建物が倒壊しています。破壊のメカニズムがこれまでの地震と違っていました。また、これも「想定外」ですが、建物自体を耐震補強しても、火山灰の土地という地盤の弱さが原因で倒れた建物もあります。

玉岡 今回、過去の震災の教訓が生かされたことはありますか？

室崎 それはあります。阪神淡路大震災では二〇万棟が全半壊し、建物の中で亡くなった方は五千人もいました。熊本地震では三万棟が全半壊し、倒壊による死者は二〇人にとどまりました。建物の倒壊による死者が比較的少なかった理由は、耐震補強が進んだことと、すぐに外に逃げたこと。過去の教訓は生かされつつあります。私たちはできる限り過去の教訓から学ばねばなりません。

人間の思い込みや

行動パターンを変える

防災ヒューマンウェアの

重要性

玉岡 阪神淡路大震災の後、兵庫県は防災教育に力を入れてきました。私は教育委員会に関わり、先日でも淡路島の学校視察に行きましたが、津波に対する避難訓練を生徒たちが真剣に行っていました。また、避難所ともなる学校で、教員がいかに動いて対処するか、専門的な知識や実践力をもったEARTHというチームが組織され、熊本の被災地でも災害復興に活躍しました。

室崎 防災教育の必要性を一番理解しているのは、災害を経験した地域です。兵庫県は「災害に強い子ども」の育成」を目的として、表面的な知識ではなく、自分で判断する力を養うという教育に取り組まれています。これは他の地域にも広めたいですね。

玉岡 瞬時の判断が生死を分けます。実地訓練は本当に大切ですね。

室崎 防災教育も含め、危機意識の啓発をヒューマンウェアといいます。人間の行動心理から考えるのです。東

日本大震災では、海沿いに住む人が海から少し離れた所に住む人が、津波から逃げ遅れる割合が高いということがわかりました。海沿いに住む人は用心して地震が起こるとすぐ避難します。海から離れた所だと「大丈夫」と油断してしまう。防潮堤や耐震補強などのハードウェア、避難マニュアルや地域コミュニティなどのソフトウェアに加えて、人間の思い込みや行動パターンをコントロールすることも大切です。

町内はさまざまな

「専門家」の集まり！

地域の「自主防災組織」が人命を左右する

玉岡 万二の時、どうすれば身を守る行動がとれるようになるのでしょうか？

室崎 年に二、三回は職場や地域、家族で防災訓練を行い、実際に体を動



※1 阪神・淡路大震災を機に設立された震災・学校支援チーム。兵庫県の防災教育推進指導員養成講座を修了した教職員で構成されている。

かして下さい。それも毎回同じ内容でなくその都度違う状況を想定する。今回は津波から逃げる訓練、次は建物からの避難や消火訓練、その次は家族で電気を使わない生活をして被災経験をイメージするなど。また、繁華街や地下街にいる時にはどうすればいいかシミュレーションしてみよう。万一の時とつさに判断するのは難しいので事前に練習しておきます。

玉岡 いろいろな局面を想定して、自分が被災した時どう行動するか実践力を養うことが大事なんです。

室崎 ぜひ町内会や自治会の中に防災組織(行政上の組織に対して、「自主防災組織」という)を作って防災計画を立てて訓練をしてほしいと思います。阪神淡路大震災で、家屋に閉じ込められた人を救ったのは地域の人々でした。町内には、医師、看護師、建設技術者、介護福祉士などさまざまな職業の「専門家」が住んでいます。皆が各自の得意分野で協力し合うことで、地域の防災力は高まります。コミュニティの力が人命を左右するんです。

玉岡 コミュニティの力は、災害直後だけでなく、その後の復旧や復興の時にも必要だと思います。もちろん行が目が行き届いて力を発揮できる可能性もあると思います。女性技術者の進出には、まず託児所の整備や老人介護のサポートなどへの、社会業界・企業の理解と協力が必要です。出産・育児・介護との両立に、フレックスタイムや週休三日の導入なども検討されては？あとは家事の分業など家族の理解が大切です。「女性ががんばれ！」とかけ声だけではなく、男性も一緒にやってほしいですね(笑)

室崎 玉岡さんは、激動の時代に活躍した女性像を多く描いておられますが、女性技術者になにかアドバイスはありますか？

玉岡 明治期に日本で活躍した建築家ヴォーリスのご夫人、ヴォーリス満喜子の生涯を描いた小説『負けんとき』という作品に、「種まく日々」という副題をつけました。これは、女性の社会進出が認知されなかった時代に、生涯を通じて教育事業に尽力された満喜子さんの業績を、長期的視野を持って幾多の困難を乗り越え、大きな実りを後世に遺したという意味で、「種をまく」と表現したのです。いま建設業で働く女性のかたも、結果を急いだり男性と張り合うのではなく、ともに協力し合い、将来の社



ハード・ソフトウェアに加え、防災にはヒューマンウェアも必要

政の支援も必要ですが、行政任せにせず地域の人々も復興計画に関わらなければいけません。

室崎 そのとおりです。「自主防災組織」があれば住民の合意形成やまちづくりにも力を発揮しますし、災害体験や教訓の継承の意味でも大切な役割を果たします。

これからの防災のありかたは？

室崎 まずはインフラ整備が必要です。老朽化した道路や橋梁の耐震補強や、耐震性の高い高規格道路の整備などを急がなければなりません。住宅でいえば、一九八一年以降に建てた家は新しい建築基準法を満たして

会基盤整備のための「種まき」をしてほしいと思います。建設業は私たちの安心・安全を支える大事なお仕事です。女性ならではの能力を発揮できる分野も多いと思いますし、それだけやりがいも大きいと思います。心から期待しています。

いま「南海トラフ前夜」を、備えと覚悟をもって冷静に生きる

室崎 いま近畿で最も急務となっているのが、近い将来必ず起こるといわれている南海トラフ地震対策です。国や自治体は防災インフラ整備を急ぎ、過去から学んでできる限りの「不測の事態」を想定した防災計画を策定しな

いるから安心、といわれますが、やはり三〇年以上経つと老朽化してきますからメンテナンスが必要です。昔は京都では祇園祭の時に冬と夏の建具を取り替えたり、家の手入れを行いました。これも防災上の知恵なんです。

玉岡 昔の人は単にきれい好きだけでなく、防災の意味も込められていたのです。

室崎 まちづくりの面からみれば、阪神淡路大震災の時、芦屋市が大火に至らなかったのは、緑地や公園が多く、延焼が防げたからです。また、緑地や公園は災害時には避難所にもなります。ふだんは住民の「癒し」の場で、災害が起こると防災機能を発揮する—そんな柔軟性のある都市計画

ければなりませんし、私たち市民も正しい知識をもって備えをしておかなければなりません。

玉岡 南海トラフ地震では、どのような揺れが考えられるのでしょうか？阪神淡路大震災とは違うのでしょうか？

室崎 建物についていえば、長時間の横揺れになります。地震の周期と「共振」することによって、揺れが大きくなる建物もあります。家具や机の固定など、自分でできる備えは面倒がらずに必ず行って下さい。家族の命は自分で守らねばなりません。

玉岡 本当ですね。阪神淡路大震災の時は自宅の家具が倒れ、テレビや電子レンジが飛んできて、家具が凶器になることを実感しました。

室崎 それから津波対策です。沿岸

も進んでいます。
玉岡 人に優しい防災へ、ハード面も進化しているのです。

生活者の視点を持つ女性がますます必要となる建設業界

室崎 防災インフラの整備や災害復旧の要となるのが建設業です。ところが建設業では深刻な技術者不足に悩み、若手技術者、とりわけ女性技術者の育成が喫緊の課題となっているのです。建設技術者不足は国土保全の面からも由々しき問題です。

玉岡 防災や災害現場では、生活者の視点が必要です。その意味で、女性技術者はますます重要になります。います。関東大震災の時、芥川龍之介が、「怖くてすぐ外に逃げ出すのは男で、細君は家の中で持ち出すものを検討していた」と書いています。いざというとき女性の方が男性より肝が据わって強いのもかもしれません(笑)

室崎 同感です。男だから平気というのは偏見ですね(笑)

玉岡 それに、女性は細やかなところにも気づくという長所がありますから、災害復旧の時も女性技術者の方部だけでなく大都市圏、例えば大阪市内の地下街などでも被害が考えられます。避難訓練も必要ですが、防潮堤などできるかぎりのハードウェアの整備が大前提です。

玉岡 津波といえば、昨年、東北の被災地を訪れましたが、倒壊と火災の被害が大きかった神戸と違って、すべてが水に押し流されてしまった跡地を目の当たりにして、あらためて自然の力の大きさ、自然の脅威を実感しました。

室崎 おっしゃる通り自然の力は大きく、すべてを想定できるものではありません。特に街の中に住んでいると、私たちはふだん自然の脅威を忘れてがちです。それで、ひとたび自然災害が起こると、たちまちパニックに陥ってしまう。そうではなくて、ふだんから、「自然の力というものはすごいんだ」、「いつ想定外の事態が起きても不思議はないんだ」、という覚悟を持つておくことが大事です。その上で、自分でできる備えをし、地域の自主防災組織などで定期的に防災訓練を実施することが、実際に災害に遭遇した時、落ち着いて行動する助けになるのではないのでしょうか。常に「想定外」を想定し、油断せず、徒に怯えず、という心構えが大切だと思います。

災害現場では、女性の持つ生活者の視点が必要です



「負けんとき」ヴォーリス満喜子の波乱の生涯を描いた小説

※2 ヴォーリスの詳細はP111~をご参照ください。